

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第36回 T I C A D 7とウガンダ

去る8月28日から30日まで横浜で第7回アフリカ開発会議（通称：T I C A D 7）が開催されました。T I C A Dという言葉の皆様もこの8月は良く耳にされたのではないのでしょうか。アフリカ関係の話題をマスコミでも頻繁に取り上げてくれていたと思います。この会議は安倍総理大臣がアフリカ全土の国の首脳を招待し、安倍総理大臣とアフリカ連合（A U）議長が共同で議長を務める大きな会議です。今回はA U議長として、シシー・エジプト大統領が来日されました。T I C A D 7ではアフリカから42人の大統領及び首脳級の首相のご臨席をいただき、26年にわたるT I C A Dの歴史の中でも最大規模の首脳会議となりました。ウガンダからはムセベニ大統領がクテサ外相、カサイジャ財務相、アチェン保健相の主要閣僚を引き連れ、その他の大臣や国務大臣も入れると10名近い閣僚級の参加者を含む豪華な顔ぶれの代表団となりました。今回は、ムセベニ大統領がT I C A D 7に臨んだ様子と日本でどのような人々と面会・面談したのかを中心に御紹介します。T I C A Dそのものではありませんが、後半ではT I C A Dと深い関係から誕生した野口英世アフリカ賞の受賞者にウガンダの方も関わっていましたので、こちらについても触れることにします。

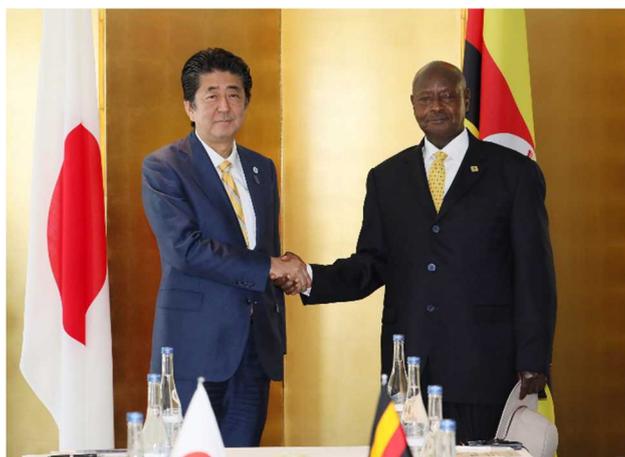


（開会式前の写真撮影に臨むT I C A D 7参加者たち）

ムセベニ大統領は、8月26日大統領専用機でエンテベ空港を出発し、翌27日午後羽田空港に到着しました。それから30日午後羽田を出発するまで丸々3日間横浜のT I C A D 7の会議場と隣接する横浜インターコンチネンタル・ホテルに滞在されました。8月31日午後エンテベ空港に戻られましたが、日本国大使として私もウガンダの要人の方々とともにムセベニ大統領を空港にてお迎えしました。ムセベニ大統領は、元気な顔でタラ

ップを降りられ、私と握手をしながら「ありがとう！」と日本語で言ってくれました。それでは時を戻して、まず横浜滞在中のムセベニ大統領を追いかけてみましょう。

28日、大統領は、ウガンダに消毒液の工場を操業しているサラヤ社の更家社長とまず会っておられます。更家社長は本年から関西地域のウガンダ名誉領事に任命されています。そして28日午後からTICAD7参加首脳による集合写真撮影、開会式に出席。続いて行われた全体会合2において発言、その間を縫ってケニア大統領との会談と多忙を極められました。全体会合2では「民間セクター育成やイノベーションを通じた経済構造転換の加速とビジネス環境整備」というテーマの下に参加者間で議論がなされました。ムセベニ大統領は、鍵となる言葉は「構造転換」、「加速」と「民間セクター」であると前置きの上、持論であるインフラを改善してビジネスコストを引き下げることにより経済生産性を高めることに傾注すべきであるとアフリカのリーダー達に呼びかけたのでした。



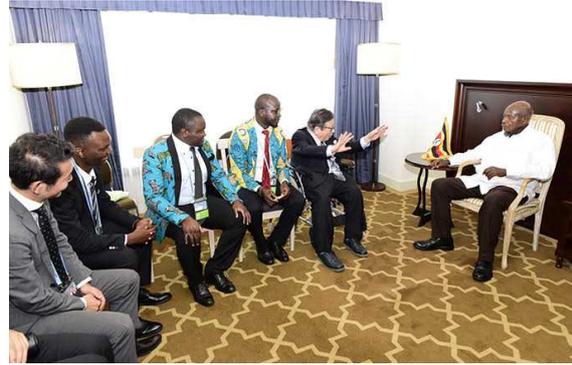
(首脳会談に臨む安倍総理とムセベニ大統領)

翌29日午前中は安倍総理大臣と二国間会談をし、続いて北岡JICA理事長と会談し、経団連代表との会見をこなされました。日ウガンダ首脳会談で、ムセベニ大統領から我が国による電力、道路、橋梁等のインフラ分野へのこれまでの支援に対して謝意が示され、職業訓練指導員の育成を含む産業人材育成の重要性を強調するとともに、日本企業からの更なる投資促進に対する期待を述べられました。午後からはエジプト大統領と会談、更に3年前にウガンダを訪問されたあしなが育英会の玉井会長と面談し、夕方は安倍総理主催晩さん会に出席しました。

30日は、高階厚生労働副大臣をはじめとするAU議連のメンバーと会見し、日本財団の笹川会長、ウガンダとビジネスで縁のある淀川製鋼代表、このカンパラ通信でもおなじみのスマイリーアース社の奥社長を引見しました。



(AU議連メンバーとの会見)



(玉井あしなが育英会会長との面談)

この様に振り返ってみますとムセベニ大統領はウガンダと関係の深い日本人関係者をほぼ網羅される形で会っておられます。大統領にとりまして実りの多い会談や面談であったと同時に、大統領と面談することのできたウガンダと関係深い日本の方達にとっても名誉なことであったに違いありません。

ムセベニ大統領に随行する主要閣僚としてクテサ外相及びカサイジャ財務大臣、それにアチェン保健大臣に加え多くの閣僚及び準閣僚がT I C A D 7出席のため訪日したことは冒頭で述べました。J I C Aは、T I C A D 7期間中他の機関・団体と共催してサイドイベントを数多く企画していました。そのうち2件にウガンダの2名の国務大臣がパネリストとして招かれそれぞれのテーマに関係するウガンダの取組について発信されました。一つは、ムロニー・エネルギー鉱業開発大臣がパネリストとして招かれた。世銀やアフリカ開発銀等と共催の「アフリカの未来の成長を支える電力セクターのイノベーション」と題するものです。アフリカの人々によりクリーンで安定的な電力へのアクセス向上を実現するための課題と可能性を議論してもらうのが目的のものでした。ムローニ大臣は、ウガンダが水力を中心として再生可能エネルギー分野での発電能力の増加を目指すとともに、地方に送電網を拡張し、今後10年以内に電化率60%を超えることを目指していると明らかにしたそうです（因みに2017年現在の電化率は19%と見積もられています。）。

もうひとつのサイドイベントは、アフリカ連合委員会や国連難民高等弁務官事務所等との共催で「移動を強いられている人々 - 連携とパートナーシップの発展に向けて - 」という題目で開催され、アフリカの難民・国内避難民問題に焦点を当てたものです。こちらにはエチュウェル防災・難民担当国務大臣が登壇されました。アフリカで行われている難民、国内避難民支援の好事例や具体的な進展の状況を紹介しながら、この問題を解決するために如何にして支援の枠組みを広げるかの討議がなされたのです。エチュウェル国務大臣は、ウガンダがこの分野で世界的にも最も先進的な取組をしていること、その背景としてウガンダ自身が難民の送出し国としての経験を持ち、その経験に基づき難民支援が国際社会と

責任を分かち合うものであるといった話をされたと聞いております。世界でも難民受入数が3番目と見積られるウガンダならではの事例紹介となったと思います。こうしたウガンダの積極的な取組がT I C A D 7の場で日本のみならず国際的にも発信できたことはウガンダにとって非常に良かったと思います。

ムセベニ大統領やウガンダの閣僚の活躍から離れますが、ウガンダと関係のある日本人がT I C A D 7で特別にハイライトされましたので、このことにも触れたいと思います。それは、T I C A D 7の開会式・全体会合における安倍総理の基調演説の中でのことでした。安倍総理は、基調演説で、ウガンダの首都カンパラで暮らすシングルマザーを雇用し、カラフルなアフリカプリントのバッグやトラベルアイテムを製造・販売する「RICCI EVERYDAY（リッチーエブリデイ）」代表の仲本千津（なかもと・ちづ）さんを紹介したのです。安倍総理は、「新時代の旗手においでいただきました。仲本千津さん(と、呼びかけられ)」、会場に座っていた仲本さんに立ち上がるようお願いされました。彼女をアフリカ首脳その他出席者に紹介するためです。



(安倍総理に紹介される仲本さん)

「(仲本さんは)ウガンダの工房で、シングルマザーや、子供時代に兵士だった人を雇っておいでです。その人たちは働きながら、自らへの自信をつけます。工房は、彼らが「セルフ・エスティーム」を育てる場所なのです。だから、でしょうか。日本の女性に向けて仲本さんがウガンダで作るカバンは、色彩の豊かさがひとときわ目を引きまします。一人の日本女性の投資が、ウガンダ女性たちの自信を育て、美しい商品へ結晶する循環ができました。日本とアフリカの協働が生む、新たな物語の誕生です。」と彼女の活動を表現されました。安倍総理の演説の中では日本とアフリカをつなぐ人たちが何人も紹介されましたが、そのうちの一番に名前を呼ばれる光栄に浴したのがウガンダでご活躍の仲本さんでした。私はその光景を録画で見て自分のことのように嬉しかったです。

そしてもう一人是非ご紹介したいのは、名誉ある野口英世アフリカ賞を受賞したオマスワ博士です。野口英世アフリカ賞は、黄熱病の研究をしているうちに自らが黄熱病の犠牲となった野口英世博士の志を引き継ぎ、アフリカのための医学研究・医療活動それぞれの分野において顕著な功績を挙げた方々を顕彰するものです。この賞は、2006年5月、小泉総理(当時)がアフリカ訪問の際にその構想を表明し、同年7月に日AU首脳共同記者会見の場で正式に創設が発表されました。以来2年間の準備を経て、2008年横浜で開催されたTICAD IVの機会に併せて第1回授賞式が挙行されました。野口英世アフリカ賞の授賞式自体はTICADの一部ではありませんが、その場に多くのアフリカの首脳が集まるTICAD開催の機会がふさわしいとしてその機会を捉えて催されてきています。2013年のTICAD Vの際に第2回授賞式が催され、今回のTICAD 7の閉会式を受け、場所を都内に移し天皇皇后両陛下ご臨席の下、第3回授賞式がにぎにぎしく執り行われました。



(安倍総理から賞状を受け取るオマスワ博士)

この第3回野口英世アフリカ賞の受賞者が、エボラウイルス病等の研究及び疾病対策の人材育成において多大な貢献をしたコンゴ民主共和国出身のムエンベ＝タムフム博士と保健従事者の教育、研修、定着等世界の保健人材危機への対処、また、アフリカはじめ世界での人材重視の保健及び医療制度の構築において多大な貢献をしたウガンダ出身のオマスワ博士でした。ムセベニ大統領は、国務のため授賞式を待たず帰国の途に就きましたので、ウガンダ政府を代表してアチエン保健大臣が出席しました。実は、6年前の第2回野口英世アフリカ賞にはやはりウガンダ人のコウティーノ博士がエイズ感染者の治療を受ける機会を増やす先駆的な活動を行ったとして受賞しています。このように名誉ある賞をこれまで二人のウガンダ人医療関係者が受賞されたことは駐ウガンダ大使として嬉しい限りの出来事です。

この度横浜で開催されたT I C A D 7は、このように日本とウガンダの関係にとっても、そしてまた、ウガンダにとっても実り多き会議となったと確信しています。この成果を足掛かりにして日本とウガンダの関係、就中両国間のビジネス関係が強化されることを望むとともに、それに向けて私も一層努力を積み重ねていく決意を新たにしているところです。

(了)